

優秀賞の「early city」は、県立高校の真正面にある雑貨店『フジイさん』の描写から始まります。高校教師の長門は店内のテレビから流れるニュースで、担任しているクラスの早川エミルが、ショッピングモールの屋上から転落死したことを知るのでした。

事故か、自殺か。物語は、生前のエミルとその周りの人々を丁寧に描きながら、エミルの死の真相に迫っていきます。

美しい容姿で成績も優秀なエミルに、さらなる完璧さを求める母親。

エミルとともにスクールカーストの上位にいる、親友の市川サツキ。

エミルとは似合いの彼氏、天才タカシ。サツキの幼馴染のユウスケ。

エミルが、サツキが、ほんとうに好きだったのは……？

そして担任の長門はエミルの録音された音声を聞き、そこに託されていた思いに気づき、ある行動を起こすのでした。

段階を踏んで事情を明かしていく物語運びが巧みですし、ラスト近くで『フジイさん』の女主人を活用しての「手紙」の使い方も、よく工夫してあると思いました。

また、「チケット」を使ったエピローグもうまいです。

優しさがにじむ「手紙」。喜びに満ちた「チケット」。「死」を扱っている作品ですが、このような「救い」を置き、バランスのとれた物語になっています。

しかし「手紙」と「チケット」二つがあることによって、それぞれの意味と効果が少し薄れてしまっているのも、どちらかひとつに絞ったほうが、より印象強く心にのこる作品になると感じました。

奨励賞「さよなら、ブルータス」の主人公は、中学二年生の丸野今日子。彼女は幾つかのルールを自分に課しています。「人に優しくする」「ずるいことはしない」など。

中でもいちばん大切なのは「自分らしく生きる」こと。「今日子」→「強子」と自ら定め、夢はスーパーヒーロー。しかし現実には「キモい」と言われたり、「ボッチ」と呼ばれたり、友人と思っていた女子に裏切られたりしています。

そんな今日子の日常と心情が、一人称「私」で、テンポよく綴られていく物語。

クラスメイト達、吹奏楽部のメンバー達、家族、姉の友人達、昔の音楽教室の先生など登場人物が多すぎるのと、作中に出てくるアメリカンコミックスや物語も数多く、全体を通してごちゃごちゃした感じがするのが難点です。とはいえパキパキとした文体は小気味よく、主人公の思いがはっきり伝わってくるのが、なによりいいところだと思いました。

リズムカルな文体は今後も生かしてほしいですが、ノリだけで書くことはせずに、構成をしっかりと考えるのと、登場人物および作中で例えとして使う漫画などを「整理」することで、物語はもっと鮮明になり、多くの読者が受けとめやすいものになることでしょう。

粗削りではありますが、伸び代と活きの良さといったものを、強く感じた作品でした。作者は作中で「進化」という言葉を使っていましたね。ますますの「進化」を期待します。